

三・七秒

大島 行雲

都市の夜空に火薬の醜えた匂いが漂っている。暫くすれば、雲の下に溜まった煙も群れ集まった人々も、いずこかへ去っていくだろう。

花火は終わった。

これからは、火花の時間だ。

美しく花を開き、一瞬の内に消えていく花火の様に、彼らも消えてくれればいいのに。

助手席から、もう見えない大華を見上げ、警官は思った。

全国有数の花火大会が行われた今夜、全国から集まった百万にも及ぶ見物客の全てが、夏の思い出を胸に静かに家に帰る訳ではない。夏の解放感、花火の音と光で焚きつけられた激情が、社会の枠を破って街中に溢れ出す。

溢れ出しているのは、それだけではない。窓から見える歩道という歩道、車道という車道に、ごみが散乱していた。ジュースの空き缶、酒の空き瓶、食べ残しの焼きそばが入ったパック、それらが視界に入らない場所はなかった。住人の家の前に止められた自転車の籠が、まるでごみ箱同然の状態になっている。指定されたごみ捨て場所が何ヶ所も設けられているにも関わらず、見物客は自分の足下や通り道に当然の如く放り捨ててい

く。

道徳の荒廃が言われて久しい。実際、彼も仕事上、常に頭に現われる問題だ。しかし、それは今に始まった事でもないのだ。未だ民衆が貴族に統治されていた時代から、同じ事が古典に記されてきた。千年以上にわたって、この国では道徳の荒廃が続いている事になる。それでも、世界は存続した。だから、気にするほどの事でもない。言葉を変えれば、道徳の荒廃とは新たな価値観への変遷なのだ。そう言い聞かせ、やりきれない自分の思いをごまかそうとしてみる。混雑する地下鉄の駅構内で、ごみ箱に時限爆弾を仕掛けて爆破させる事が新たな価値観なのだ。思える訳がなかった。根本的な解決、抜本的な対策を、そう政治家や学者は声高に叫ぶが、彼ら警官の手による対症療法さえ遅々として進まない。

目の前の信号は青を示しているのに、パトカーの前を三人の若者が横切っていく。その中の一人の女は、おどけた様子で交通整理の真似までする始末だ。だが、彼らは気にしない。いちいち信号無視を取り締まっていたら、一日が二百四十時間あっても足りないだろう。

罪が見逃されるから世の中が荒廃するというのは、一理ある説明だが、取り締まれば世の中は浄化されるといふほど物事は単純に進んでくれない。所詮、取り締まる者も曖昧な境界に生きる同じ人間なのだから。

どこから叫び声が聞こえる。どこからか黒い煙が上がっている。

「おい！」

運転席の相棒を促し、煙の下に急行する。山積みにはされたみ袋の山が、異様に臭う煙を立ち上らせて燃えていた。白いビニール袋が不安を煽る早さで、めらめらと黒く変色し、さっきの花火よりも驚愕の炎で彼の視界を染めていく。

「犯人は？」

「あっち！ バイクに乗った連中だよ！」

必死に消火活動を続ける地域住民が、上ずった声で叫んだ。と同時に、車は放火犯を追って走り出す。パトライトが点滅し、サイレンがけたたましく鳴り響く。猛スピードで走っていく二人乗りのバイクが見える。ナンバープレートは折れていて読めない。パトカーが一気に加速して距離を縮め始めた時、前方で繰り広げられた光景に咄嗟に運転席の同僚はブレーキを踏んだ。

交差点の真ん中で乗用車が停車していた。後方に長くタイヤ痕を残して。ヘッドライトは無残に割れ、破片が道路に散らばっている。離れてバイクが横転している。そして、転がった二体の身体。

パトカーを下りた警官に、乗用車の運転手が慌てふためいて言い訳を繰り返す。

「こいつら飛び出してきたんすよ」

信号は青だった。飛び出してきたのは乗用車の方だった。呂律が回ってないし、目の下や頬が赤味を帯びている。恐らく飲酒運転だろう。いくら法律が改正されて罰則が強化されても、何も変わらない。誰もが、自分だけは、などと考える限り。

バイクの運転手と連れの男は、一見して即死状態だった。ノヘルの頭は異様に拉げ、アスファルトに赤黒い液体を流している。

「手間がはぶけたな」

相棒の警官が呟いた。それには答えず、彼は無線で救急車の出動を要請する。

何もかも狂ってる。少年が放火をし、酔っ払いに轢き殺され、それを警官は喜ぶのだ。正義の味方などいなかった。彼らは、単なるサラリーマンに過ぎない。警棒と拳銃を持ったサラリーマンだ。この間違った世の中を少しでも良くしたいと思って警官になった彼だったが、彼の知る限り、そんな気持ちを持った同僚は殆どいない。青臭いと冷やかされ、疎んじられるのを恐れて、彼もまた皆には「拳銃を合法的に撃ちたいから警官になった」と嘯いていた。実際、拳銃には、すっかり慣れた。昔は正当防衛で発砲しただけでも、全国的に報道されたというのに、今では、そんな日常の出来事を報道する記者などいよう筈もない。

いや、こんな思いでいるのは自分だけじゃない筈だ。誰もが胸の内、熱いものを抱えながら、それを口に出すのを憚っているのかもしれない。そう思いたい。

「救急車なんて呼んでも無駄じゃない？」

相棒の警官が言った。果たして、彼も自分と同じ人間なのか。堪らない気持ちを抑え、動揺する乗用車の運転手から事情を聴く。携帯用キットで彼の呼吸を調べ、飲酒運転だった事を確認した後、身体検査を行う。武器になるような物を持っていないか、自殺に使えるような物を持っていないか。

すっかり酔いが醒めて青ざめた顔の運転手は、中年太りしたワイシャツ姿の男だった。襟のボタンを外し、だらしなくネクタイを緩め、酒臭い息を吐いて、相変わらず言い訳を繰り返す。この国では一年に三万五千人以上も人が自殺している。その多くが、この運転手と同じ中高年の男性だという。かく言う警官の彼も、その中に当てはまる。自分と同じ年代の人間が、一日に何十人も自殺しているのだと考えるだけで慄然とする。同時に、やはり人々は自分と同じく苦しんでいるのだとも思う。が、この国の人口は減少しているとは言え一億人近くいて、自殺者は、その1%にも程遠い。別に自殺者を賞賛するつもりはないが、いい人は皆、死んでいってしまう。

彼の同僚は仲の良かった夫を刺し殺されて失った。コンビニエンスストアで百円かそこらのチョコレートを買って引去るの

を偶然に見つけ、注意をしたのが災いしたのだ。夫の理不尽な死を受け入れきれないまま、彼女は気丈に働いている。

酔っ払いを後部座席に乗せ、パトカーは署へと向かう。路上の白いビニール袋が、パトカーの起こした風に煽られて、どこへともなく滑っていく。自然の風は吹かない。湿った空気は都市のビルの狭間に、溝に溜まった汚水のように鬱々と沈殿している。

多分、今夜も熱帯夜だろう。

警察署の中は、街中にまして騒々しい。出勤していく同僚、連行されてきた容疑者、様々な人々が時間を無視して出入りしている。彼と相棒は酔っ払いを手近の椅子に座らせた。取調室は満室で使えない。

薄茶色の髪を後ろで束ねた女の腕を乱暴に掴み、女性警官が彼の前を通り過ぎる。

「きたねえ手でさわんじゃねーよ！」

耳を劈く様な怒鳴り声を上げて、若い女は腕を振り解こうとする。ピンク色のびったりしたTシャツと何やら意味不明な金属をじゃらじゃらとつけたジーンズの間からは、色白の腰が覗いている。

「マリコちゃんにさわんなっ！」

横から締めまらない男の叫びが聞こえた。若い女と女性警官が振り向くと、叫んだ男は口を塞がれ、二人の警官に取り押さ

えられて連れ去られる。彼より少しばかり年上に見える。

「おい！」

「……はい？　なんですか？」

「なんなんだ？」

彼が顎で若い女を指し示すと、女性警官は呆れ顔で答えを返す。

「売春に決まっつてんじゃない。馬鹿な客ですよね」

「マリコつてのかわ」

「どうせ本名じゃありませんよ」

女は目を逸らし、カウンターの端を睨みつけている。はつきりとした大きな瞳には濃くアイラインが引かれ、ぼつちやりとした唇は毒々しい口紅がこびりついていた。が、頬は幼児の様にふっくらとしている。

「みのりだ」

「……え？」

女性警官が聞き返す。女も不審げに彼を見た。

「伊藤みのりだ。太平に住んで……いや、住んでたかな」

「ちよっと、まさか、システム使つて女の子の住所調べたりしてんじゃないでしょうね」

「馬鹿言つな」

警察署に蓄積された個人情報膨大なものだ。それを悪用しようと思えば恐ろしい話になるだろう。そこまでやるものがど

れほどいるかとはともかく、日常的に軽い気持ちで一般市民の個人情報盗み見る職員は随分といた。が、彼女の事を調べた事はない。

「近所に住んでた子だ」

伊藤みのり、と思われる若い女は顔を顰め、舌打ちして再び目を逸らした。女性警官は、そんな彼女の腕を強く引いて、再び歩き出す。

それを見送つて、ゆっくりと彼は鼻孔から息を吐き出す。

十年前、彼女は可愛い女の子だった。道で会つと屈託ない笑顔で、彼に挨拶してくれたものだ。愛らしい浴衣姿で線香花火を見つめていた少女の姿を、今でも彼は覚えている。

相棒は淡々と、事務的に先程の酔っ払いの取り調べを進めている。彼は何も言わず、その場を離れた。

あの少女を、いや、元少女を連れて行った女性警官の机上に、似合わないブランドものの真つ赤な鞆と雑多な物が置かれている。

口紅、パンダの絵が描かれたタオル、黒い革の財布とシステム手帳、携帯電話、ストップウォッチ。

「何？　これ」

「さっきのソープの女のですよ」

ソープの女。浴衣と線香花火。

「このストップウォッチが？」

「あれ、知らないんですか？」

「何を？」

「それ、何分でイカせるかって勝負すんですよ」

この世は地獄だ。いや、地獄より惨い場所だ。

彼が生まれた頃、既に世の中は大きく変わるうとしていて、犯罪件数も増大していた。一年間で百六十七万件以上の刑法犯が認められたと犯罪白書に書かれていたのを覚えている。

が、今、その数は激増した。昨年度の刑法犯認知件数は、八百五十万件を越えた。三・七秒に一件の割合だ。

ストップウォッチを手に取り、ボタンを押す。

一、二、三……